

以下の文章は、上田紀行 編著「新・大学でなにを学ぶか」(岩波ジュニア新書、2020年)に収められている、池上彰氏の「自ら問いを立てること」と題されたものを一部抜粋および一部改変したものである。

この文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

「自ら問いを立てること」 池上 彰

| 大学進学はお金がかかる

あなたはなぜ大学に進もうと考えているのでしょうか。他にも進路はあるのに。

高校を卒業したら就職する。フリーターになる。専門学校に行く。自分で会社をつくる、つまり起業する。海外に放浪の旅に出る。

実にいろんな可能性があるのに、大学に進学すれば、それ以外の道をいったんはあきらめることになります。

これを経済学では「機会費用」といいます。あることを選択したことで、他の機会を逸^いする。大学に進学することを選択すると、他の機会を逃すのです。その費用は、どれくらいでしょうか。

たとえば大学の学費。国公立と私立では大きな違いがありますが、ここは一年間で100万円だとしましょう。四年間で400万円です。ずいぶん費用がかかりますね。でも、かかった「費用」は、これだけではありません。進学せずに就職していれば、一年間に250万円は稼げたでしょう。四年間なら1,000万円です。大学に進学することを選択したことで、あなたは1,000万円を得られる機会を放棄したのです。学費と合わせると、1,400万円にもなるのです。

このように考えると、大学進学は高くつきます。「とりあえず大学にでも行っておこうか」などと考えていると、大変な金額の損失になるのです。

でも、大学で学んだことで、自分の将来が豊かになれば、機会費用は決して無駄になりません。むしろ「投資」と考えることもできます。

投資とは、初期に投入する資金を増やそうとすること。成功すれば、何倍にもなってお金が返ってきます。

大学を卒業したことで、いい就職ができ、高収入が得られれば、いずれ大学に進学したことで失った1,400万円分は取り戻すことが可能になるのです。

これなら意味があること。まあ、こういう考え方もできますが、でも、大学に行くことをお金の面だけで考えるのは、ちょっと寂しい気がします。大学で学ぶことは、お金の還元するだけではないからです。

| 生徒ではない、学生だ

大学生は「生徒」ではありません。「学生」です。何が違うのか。

高校までは生徒でした。先生が間違いのないことを教えてくれ、あなたたちは、それをそのまま受け止めていればよかったからです。まさに「先生の徒(教え子)」です。

しかし、大学は違います。先生が教えていることは100%間違いのないこと、とは言えないからです。先生の言うことを鵜呑みせず、「本当かな」と自分の頭で考える。学生、まさに「自ら学ぶ者」なのです。

あなたが大学に進学したら、誇りを持って「私は学生です」と言いましょう。

「すべてを疑え」

大学で先生から教わることは、学界の中で主流ではないかも知れない。そうすると、教わる内容については、疑ってかかった方がいいかも知れません。

かつて私は大学の指導教授に「すべてを疑え」と叩き込まれました。どんなに著名な学者の理論であっても、ありがたがってはいけい。間違っているかも知れない。まずは疑ってかかることが必要だ、というものでした。

以来、私はこれを信条としています。このときの指導教授の話を疑ってみなかったのですね。

私は大学の講義でも学生諸君に「すべてを疑え」と話しています。

ただし、気をつけなければいけないのは、この姿勢は学問の場に限るということです。ふだんの生活でこういう態度を取ると、友人や恋人を失います。

友人や恋人は信じましょう。結果的に裏切られることがあるかも知れませんが、それも人生。その苦い経験を経て、人間は成長していくのです。

友人は信じ、学問の世界ではすべてを疑う。この姿勢を大切にしてください。

「良き問い」を立てること

小中高校で「成績がいい」というのは、どんな児童でしょうか。先生の質問を聞くと、すぐに先生が求めている答えを探って「良き答え」を出すタイプではないでしょうか。

こういう学校生活を送っていると、世の中には必ず「正解」があると思ってしまうようになります。

しかし、世の中には何が「正解」かわからないものは、いくらでもあります。

たとえば、少子高齢化が進む中で、限られた国の予算は、高齢者のために使うべきか、子育て世代の若い人のために使うべきか。

世の中をここまで築き上げてきた先輩たちの苦勞をねぎらうために、年金や医療費の面で高齢者を優遇するのは当然だという考え方もありますが、一方で、子育て世代を支援しなければ、子育てがしにくい社会となり、少子化は一段と進んでいくでしょう。さて、正解は何か。

簡単には答えが出てこないでしょう。世の中には「正解」が不明だったり、そもそも存在しなかったりすることがあるのです。

そうすると、「良き答え」を追い求めるのではなく、「良き問い」を立てる方が重要だということがわかるのではないのでしょうか。たとえば「高齢者も子育て世代も安心して暮らせる社会とはどういうものか」という問いを立てるのです。そこから解決策を求めて、人々の知の探究が始まります。「良き問い」を立ててこそ、世の中は良くなっていく可能性が開けるのです。

そこでまずは、「どこの大学なら入れるか」という答えを探すのではなく、「大学で何を学ぶか」という問いを立てることから始めてください。

(出典：上田紀行 編著「新・大学でなにを学ぶか」岩波ジュニア新書、2020年、一部抜粋および一部改変)

【設問】

大学というのは、卒業後に得られる収入といったお金に還元されるものだけでなく、自分を見直す時間を確保することができたり、先生が自由に教えたり、自由に研究できる場所でもある。また、そうした大学で学ぶ上では、何が正解かわからないものも多く、上記の文章でも「『良き問い』を立てること」が重要であるとしている。

上記の文章の中で出てくる問いの例として、「高齢者も子育て世代も安心して暮らせる社会とはどういうものか」というのがある。自分なりに自由に「問い」をひとつ立てて、それについてどう考えるかについてあなたの意見を 400 字以上 800 字以内で書きなさい。ただし、「問い」についての分野は、問わない。